

論文で之には尙ほ今日議論のあるものであらうが著者は割合單簡に評し去つてゐられる。而して唯識派の三大立物たる三師の年代を定めて彌勒は二七〇——三五〇年、無著は三二〇——三九〇年世親は三二〇——四〇〇年位と見てゐられる。

大體斯んな内容をもつた専門的の書であるが、一般佛教學者にも極めて有益であるから切に愛讀をお勧めする。(菊版、凡四二〇頁、定價四圓五拾錢、東京市赤坂區青山町甲子社書房發行)(手島文倉)

(附記此貴重なる書の紹介の遅れたことを著者並に發行者へお詫びします。)

ヨハンネス  
フォルケルト **悲劇美の美學**

金田 廉 譯

本書はフォルケルトの *Der Symbolbegriff in der neuesten Ästhetik* 1876, *ästhetische Zeitfragen*, 1895 にいつて出版せし *ästhetik des 19. Jahrhunderts*, 1897, の第四版一九二三版の譯書である。本書の二版が出る一年前かの *System der Ästhetik*, 7. の一巻が出た。そして三版が出る七年前に二巻が三年前に三巻が、出てゐる。Zwischen *Dichtung und Philosophie* 1908, *Kunst und Volkserziehung*, 1911, もみんなこの間の努力である。獨りこの本書のみが四版も版を重

ね、しかも割合に初期より最近に至るまでの彼の思想の里程標として版を重ねる毎に多少ではあるけれども重要な改訂を興へてゐる事は注意を要すべき事であらう。

アリストテレス以來、悲劇的なるものに關して多くの美學上の論争が繰返された、而してその多くは常に形而上學的論理的立場の相異より來る論争であつて、方法的立場の相異より來るものは少い。本書はその後者より來る興味ある研究の一つである。フォルケルト自身が第一版巻頭に云へる如く「この研究は美學上の文殊の著しき缺陷を滿す目的をもつてゐるものである」それがその目的を達したか否かは別として、彼は經驗心理學的立場に立つことによつてその豊富なる例證、その包括的なる視點をもつて從來の論理的狹量性より脱せんを試みた。従つてその材料の選擇に際して何等の豫想もなく、又その體系的根柢に一般に思惟の根本的傾向である處の畫一的なるものをも見ない。只ひたすらに心理學的であらうと努めてゐる事をそこに認める。自然、彼はその例證に於いて偉大よりも多數を、構成に於いて統一よりも多様を目標としなければならなかつた。

彼はすでに一版に於いて從來の人々の論理的根據としてゐたエスキロスよりクライストに至る代表的悲劇作家以外のいやくも悲劇の名のつく非常に多くのものについて説明と解剖を惜まな

つた。二版に於いても一版の公けにしてより以後著されし作品を新しく多数に引用する事を忘れなかつた。三版に至つては二版以後十一年間に現はれし文學者の多数パウエル・エルンスト、ヘルメルト・オイレンベルグ、エルンスト・ハルト、ウイルヘルム・フォン・シヨルツ、その他)について更に論じ、四版に於いては更に更に多数の新しい文學者がその全系列を分類され、それに對する彼の態度が定められてゐる。しかもそれが、組織を完成するに云ふ意味でなくむしろ單に附加されて行くに云ふ意味に於いてある。

更に彼は一版に於いて最後の章である所の形而上學への展望を全篇より獨立してゐることを注意深く讀者に警告した。又それは彼の立場よりは必然的にそうあらねばならない事であつて、彼に取つてはアリストテレスの世界觀がエスキロス・ソフォクレスのそれと異なる事によつて彼の悲劇論すらもが謬に陥つたと思惟せられた。然るに二版が出るまでに彼の美學體系の一巻が出てその十六章及十三章に改訂の必要を感じ、のみならず新しく十四、十九章を加へなければならなくなり、更に三版が出るまでに美學體系の二卷三巻が出た事によつて、その形而上學的展望である所の最後の章に關して彼が云ふが如く「根柢から改訂しなければならなかつた、而して悲劇美の美學との結合をより有機的にならしめなければならなかつた。」四版に於いては更に「從來そうであつたよ

りも一層密接に結合しなければならなかつた。」  
かくの如き材料の選擇に於ける質よりも量を重する態度、及それに聯關して徹知的なるものに關する嚴密なる經驗科學的態度の中には其自身或困難を感じるものがある。(たゞこゝにそれによつて多くの長所があるとは云へ。)

尚こゝに注意すべきは、三版の刊行されたのが世界の地上に見出した最も慘虐なる悲劇である所の世界戰爭中であつた事であつて最後の章を彼が改訂するに當つて、筆一度々の戦に及ぶや遂に生氣を帯ぶるものがある。四版は戰果て、四年半を経て出てゐる。革命と極度の内面的錯亂、獨逸國民の軍備撤廢、敵によつて強ひらるゝ禁從の中に在つて、彼は云ふ、「かゝる事件の眞只中に立つてゐるために直接現在の悲劇に對して一つの俯瞰的立場を得る事は私には殆んど不可能にさへ思はれる。」さ。しかも彼はその困窮の裡に自らへの信仰を失ひ行く民族全體の瀕暮の中に、或は休みなき魂の安寧を東洋に求めんとする逃避の群の中に立つて「マイステル・エックハルトミルテール、ライプニッツとカント、バスターロツチとバイヒテ、吾人の偉大なる詩人と音樂家を産んだ一つの國民が永久にその英雄的なる過去と共に亡びる事は不可能である。自滅の決定的悲劇は決して襲ひ來つてはゐない。期待さるべき新しきもの、中には前世紀の獨逸理想主義の獲得したる偉大にして

且つ深刻なるものが力強き生産力をもつて生き続けるであらう」と叫んでその巻末を結ぶ句としてゐる。かゝる民族の境遇に在つて老翁の放ちしかくの如き言には言葉自身の中に種 Das Irresische 悲劇的なるものが感ぜられずにゐられない。

譯書の方々に不明なる點がないではなかつた。特に氣がついたのは一五頁の「主人公『英雄』……」の『英雄』は寧ろ原語のまゝにされた方が誤解が少いかと思はれる。しかしかゝる權威ある而も大部の書を譯出し下されし努力を思ふ時深甚の感謝を我學界のためになすものである。(大村書店發行、中井正一)

### 寄贈書籍雜誌

哲學雜誌、丁西倫演講集、心理研究、觀想、内外教育評論、學校教育、教育時論、願慧、信濃教育、東亞之光、教育學術會、支那學、東洋思想研究、都市教育、生理學研究、教育論叢、密教學報、講座。